HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芸術作品における道徳と美の関連性についての研究 [全文の要約]
Author(s)	栗, 楨
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14562号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81246
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Zhen_Li_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

人文学専攻：博士（文学）　　氏名：栗桢

学位論文題目

芸術作品における道徳と美の関連性についての研究

本論文で、私は芸術作品における道徳的価値と芸術的価値の関連性における内在的関連問題に着目し、作品が表現している道徳的態度と作品の芸術的価値とはいかなる形で関連しているのかという問題に答えた。

本論文は、個人的な優れている特質を含むすべての優れている特質を代表する広い意味での「倫理的」概念を排除し、他人に向かっている行為、動機と感情だけを含む狭い意味での「道徳的」という概念を採用した。さらに、形式美および感覚的な特質のみ含まれている狭い美的概念を排除し、芸術的価値と同一視することができる広い意味での美的概念を採用した。

論文の構成は大まかに三つの部分によって組み立てられている。芸術作品における道徳的価値と芸術的価値の内在的関連問題について、作品の道徳的価値（即ち、作品の道徳的な善さ或いは悪さ）と作品の美的・芸術的価値は無関係であると主張する自律主義(autonomism)、作品の道徳的長所が作品の美的・芸術的長所になり、作品の道徳的短所が作品の美的・芸術的短所になると主張する道徳主義(moralism)、および作品の道徳的な短所が作品の美的・芸術的長所になり、作品の道徳的長所が作品の美的・芸術的短所になると主張する不道徳主義(immoralism)、という三つの立場を詳しく検討した。

まず、自律主義に反論するため、および道徳主義と不道徳主義と密接な関係をもつ作品における認識的価値を検討する。

芸術作品は人々にトリビアルではない（かつ芸術作品自体と関係しているだけではない）知識を教えることができる。このような知識は、様々な種類に分けることができる。そして、芸術作品は、直接的或いは誘導的な推理や、様々な経験の提供、さらに自分がある知識の証言になることや人々の想像能力を活かすことによって、知識を伝達する。

また、推理で知識を得る場合の推理には二種類ある。すなわち、直接作品の中に現れている推理と、文字および作者が作品中に設置した要素を自分で分析して、作品全体、或いは作品の中の人物と展開とを評価する際の推理である。

経験によって知識を得る場合に、芸術作品が伝達しているのは、対象からの直接経験とは異なる、芸術作品だけからもたらされる特殊な経験である。この芸術的な経験は人々が元々所有している経験と関係している。さらに、芸術作品、特に写実的な芸術作品自体を体験した人々は、概念、技能、そして識別能力といった様々な知識を得ることができる。

想像によって知識を得る場合には、心理学のシミュレーション理論がその説明を与えていたように、我々はシミュレーションによって、相手の心理状況と物理状態を把握することができるだけでなく、相手の状況を出発点として、自分の想像力によって相手のこれからの行動と感受などを予測することもできる。そして、想像から知識を正しく得るため、我々は想像にルールを付け加えて、自制する必要がある。

最後に、様々な反論に再反論することによって、最も重要な結論を擁護することができた。すなわち、芸術作品の認識的価値が存在するという結論である。この結論は芸術作

品の認識的価値と美的価値の関連性を論証する重要な前提となっている。さらに、芸術作品の美的価値と道徳要素の間の関係など様々な問題に大きく影響する。

さらに、芸術作品の認識的価値と美との関連性を、直観を参照した実例の提示、評価言語の使用、Noel Carrol が道徳と美との関連性を論証するために提出した論法の本稿の論点に対する適用、という三つの点から証明することができた。我々は、芸術作品における認識的価値は作品の美的価値に影響すると結論づけることができる。そして、作品の認識的価値と美的価値に関連性がある場合には、作品の認識的価値が高いほど、作品の美的価値は高くなる。

この結論は芸術評論の実践に用いることができるだけではない。この結論は、芸術作品の美的価値が認識的価値や道徳的価値とは無関係だと主張する美的自律主義が誤りであることを導く。なお、作品の中で我々に伝えられている道徳的知識が美的価値と関連性をもつのは、この知識が認識的価値の一部であるからである。

美的自律主義における Posner のラジカル自律主義、すなわち芸術作品を道徳的に評価することはできないという主張は、一部の芸術的カテゴリーにおいて道徳的内容がもつ重要性を無視しているとしてしばしば批判される。一部の芸術作品にとって、道徳的な側面は偶然的な部分ではなく、構成的な部分である。したがって、これらの作品に対する道徳的評価はありうる。さらに、芸術的作品に対する道徳的評価がしばしば我々の芸術的評論に見られるという実践的事実により、芸術作品に対する道徳的評価を否定するラジカル自立主義のような美的孤立主義は、我々の芸術的評論の実践に莫大なエラーをもたらすことになる。

穏健な自律主義は作品の中にある道徳的価値の存在を認めるが、その道徳的価値と芸術的価値との関連性を否定する。しかし、穏健な自律主義に対する最も力をもつ反論は、

芸術作品の道徳的価値と芸術的価値の内在的関連問題における道徳主義か不道徳主義の成功である。したがって、仮に道徳主義か不道徳主義が成功したら、穏健な自律主義は自動的に失敗することになる。

芸術哲学における道徳主義の二つの立場を検討した。まず、穏健な道徳主義は作品の(美的・芸術的関連性をもつ)道徳的短所(或いは長所)がときに作品の美的・芸術的短所(或いは長所)になる、と主張するが、それは一部の論者からみれば文脈的で不完全な理論である。穏健な道徳主義が提供できるのは、芸術作品における道徳的価値と美的・芸術的価値の関連性についての、ごく一部の真実でしかない。この立場に留まる限り、それが主張する「ときに」以外の莫大な可能性に対する答えは、いまだ未解決で未知の状態にある。

しかし、穏健な道徳主義と比較して、美的・芸術的関連性をもつ道徳的短所(或いは長所)が常に作品の美的・芸術的短所(或いは長所)になると主張する倫理主義には、より重大な問題点がある。すなわち、作品の道徳的に善い態度が作品の認識的価値を阻害することがあるために、純血の倫理主義ですら作品の道徳的長所と美的・芸術的長所の間に不変的な繋がりを構築できない、という問題点である。それゆえ、残念ながら、芸術作品における道徳的価値と美的・芸術的価値の不変的な関連性を示すという倫理主義の企てが成功する望みは薄いと言えるだろう。

そして、。したがって、必ずしも作品の芸術的長所になるわけではない。

Gaut による、道徳的善さと美しさとの繋がり、および道徳的悪さと醜さとのつながり、という観点には価値があるが、独裁と圧迫としての道徳および反抗と自由としての不道徳の本性を無視した原因で、必ずしもそうではない。道徳的善さと美しさ、および道徳

的悪さと醜さとの間の繋がりが必然的でないかぎり、道徳的美論証は倫理主義を支持する論証にはならない。

したがって、芸術哲学における道徳主義の二つの立場の比較から、穏健な道徳主義のほうがより正しいあり方である、と結論づけることができる。その根本的な理由は、恣意的で単純化された方法では解釈されえない、多様性と自由な精神にあふれた芸術の本性にあるのかもしれない。

芸術哲学における不道徳主義の検討に入る前に、まず Slote による有名な、立派な不道徳論証を検証した。Slote は立派な不道徳が成立しうる三つの主張を提出した。

強い主張：不道徳的行為自体がときに立派なことである。

　弱い主張：ときに、不道徳の行為の中に表れた特質が立派なものである。こうした立派な特質が偶然的に不道徳の行為とつながっている。

中間的主張（intermediate thesis）：ときに、ある人の立派な特質が不道徳と内在的に関連している。こうした関連は偶然的ではなく、立派な特質に対する我々の好意は必然的に不道徳的行為に伝達する。

そして、弱い主張および中間的主張は成立しない以上、不道徳主義を支持するために、論者が最も依拠することができるのはニーチェ主義的な強い主張である、ということを明らかにした。この主張は私自身が提出した不道徳主義的論証にも用いられている。

　不道徳主義における最も古い二つの論証である CIA と内在的目的論証はそれぞれ Stecker により批判されている。CIA および WECIA の最も厳重な問題点は、それが作品の提供しうる認識的価値が作品の不道徳的態度から由来することを証明できない、ということにある。そして内在的目的論証に関して言えば、実際のところ、作品は道徳的短

所をもっていても成功することがありうる。言い換えれば、作品はそれが抱える欠点を乗り越えて、ほかの要素のおかげで成功することが可能であり、それゆえ内在的目的論証は失敗しているのである。

さらに、私は芸術哲学における不道徳主義を支持する最新の三つの論証を分析した。

まず、Eaton の強い不道徳主義の論証では、鑑賞者たちが実際に作品を魅力的だと思う理由がキャラクターの良い特質にあるのではなく、まさに道徳的短所にあるのだということをうまく証明できなかった。さらに、Carroll の反論に対する Eaton の二つの回答は自己論駁的であったため、自身の論証を守ることができないだけでなく、自分の第二の論点をさらに弱体化する結果を招いていた。

続いて、Nannicelli の発生論的アプローチについての説明は、帰結主義的な判断を採用したせいで、帰結主義に対してしばしばなされている批判が避けられない上に、作品の制作過程で行われた行為の中には不道徳な行為があるということを証明できなかった。さらに、発生論的アプローチが着目しているのは作品自体の不道徳性ではなく、作者の不道徳性であるため、発生論的アプローチによる不道徳主義はかなり弱い論証になってしまっていた。

最後に、Woodcock の相対主義的アプローチは、悪意のあるユーモアの道徳的短所が作品自体の面白さに貢献することをうまく説明できなかったため、喜劇不道徳主義を支持する十分な論証とは言い難いものであった。

最後に、私は不道徳主義を支持する二つの新しい論証を提出した。

私の考えでは、不道徳主義を支持するためには、道徳および不道徳の本質に着目すべきである。道徳義務の重要な特性には、ヘアが定義した優先性（overridingness）や、バ

ーナード・ウィリアムズが指摘した最高の規範性がある。そして、不道徳とは道徳義務に違反することにほかならない。

したがって、まず、道徳義務が最高の規範性を有する以上、それに違反するためには、人々が不道徳な行為を行う理由は道徳と同等かそれ以上の力をもたなければならない。ゆえに、芸術的な表現手段としての不道徳は、何らかの理由や考えがもつ力・重要性を表現するためにもっとも効果があると考えられる。さらに、トランスグレッシブ・アート（transgressive art）においても 2、道徳義務は何よりも優先されるので、道徳に違反すること（すなわち、不道徳であること）はもっとも激しい反抗（transgression）になる(TI)。このように、理由や考えの重要性を表現するものとしての不道徳と、もっとも激しい反抗行為としての不道徳は、それぞれ作品の芸術的意図の達成（artistic success）に貢献するという側面から見れば、作品の美的・芸術的価値に貢献するだろう(IMAE)。さらに、私が提出した IMAE と TI は、不道徳的な作品が不道徳の道徳権威に対する反抗とすることの認識が表れ、そしてこれらの作品が意図的に不道徳の上述の特質を利用している作品に所属している。TI は今までで初めて直接的策略を採用した論証であるため、正真関連問題を回避することができる。

上述の検討により、芸術作品における道徳と美の関連性について、その内在的関連問題に対する答えは、文脈主義こそが最も正しいと結論づけることができる。芸術作品に対する道徳的評論という我々の実践は、自律主義ではなく、倫理主義でもなく、作品の道徳的短所がときに作品の芸術的短所になるという穏健的道徳主義、および作品の道徳的短所がときに作品の芸術的長所になると主張する不道徳主義が共存しているものである。